
私立望標学園

超電磁ボーイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私立望標学園

【コード】

N2682Q

【作者名】

超電磁ボーイ

【あらすじ】

のぞしめがくえん
望標学園でおきる青春ストーリー

プロローグ（前書き）

今回初めての長編です！

プロローグ

「長かったな〜3年間、いろいろあったからな〜」
桜並木を歩きながら思い出してみる

「あいつら、集めて思い出話するかな!」

~~~~~

キャラ説明その一

主人公

とくおか もつげん  
徳岡妄幻

身長170cm

年齢15歳

性格 まじめ

得意科目

英語 国語 数学 理科

ヒロイン

とくおか きそつ  
徳岡希想

155cm

14歳

性格 騒がしい

得意科目 体育・保健以外

妄幻の妹でもある

## プロローグ（後書き）

次回予告

主人公の妄幻が不思議な腕輪を装備する  
新たな環境、新たな仲間

新たな環境、新たな仲間（前書き）

お兄ちゃん！学校行くよ！

## 新たな環境、新たな仲間

「学校長の言葉、天皇龍次先生お願いします」  
ワイルドな男性がマイクを取った

「新入生の諸君！私が校長の天皇だ。お前たちには、これから三年間学生生活が始まる楽しむものもいいが勉強もやってもらう！この後、各クラスで話がある。俺からは以上だ！」

メガネをかけた先生 井口先生が慌てて

「あ、ありがとうございます。各クラスの担任は、生徒を連れて移動してください」

井口先生が俺のクラスの担当なので、先生の指示で1-1に移動したクラスの人数は、女子12人男子15人の26人である

「それでは、まず自己紹介しますね」

黒板に、国語科担当 井口野良と書いて

「井口野良です、よろしく」

「皆さん自己紹介してください」

そして俺の番がきた

「徳岡妄幻です、よろしく」

と簡単に紹介をしたのに・・・

「幻兄ちゃんの妹の希想です よろしくね！」

クラスがざわついた・・・視線が痛い（幻兄ちゃんだと？なんだアイツ）

ガタン！と教室に響いた

「オイ！クソ妹！何で学校でくお兄ちゃん＞なんだよ！」

そして妹も

「えゝ何で駄目なの？」

そしてクラスが固まった

「あ、アレ！？なんか変かな？」

「バカ妹後でじっくり話してやる」

とそこに

「すいませ〜ん遅れました」

と短髪の可愛い女子が入ってきた

「自己紹介したら席に座ってくださいね」

「はい！初めまして祈芽羅曲狐です！よろしくね」

と席に座った

全員終わると井口先生が

「これよりDBBの設定をおこないます。川奈君こっちに持ってきてください」

そして一人の女子が変な機械を持ってきた

「これは、DBB (Delusion Battle Bracelet) の略です。これを使ってクラス対抗戦をおこないます」

みんなの顔が固まった

「まず、試しに妄幻君こちらに」

俺が呼ばれた。そうここから俺の青春が大変になった

「はい」

と返事をして機械に近づいた

「そこに右腕を入れて」

指示ど通りに手を入れると、スライムのような感觸の幕が手の周りにひつたりにひつついた。最初が青だったのが黒に変化した

「頭の中で武器のイメージを作り出してください」

作り出したのは、刀 長い刀だ 次の瞬間光だした！

「ーっ！」

手に黒い腕輪がついていた

「合言葉は、友のための犠牲だよ」

「なんですかそれ？」

「武器を出すための言葉だよ。心の中でつぶやいてみなさい」  
つぶやいてみた、黒い光が右腕を覆った

腕輪が一回り大きくなり、武器へと変化していく

そこには、1.5mの日本刀が現れた

「な、何がおきてるんだ？」

**新たな環境、新たな仲間（後書き）**

**次回予告**

**DBBを手に入れた妄幻**

**練習でのチームで、曲狐と緩奈と希想の4人でやることに  
力とカタチ**

力とカタチ（前書き）

「な、何がおきてるんだ？」

## 力とカタチ

みんなの目が俺の日本刀に集中した

「これが、DBBです。」

そこには、本物みたいな日本刀がある。さっきまで腕輪だったのに「これが、妄幻君がイメージした武器です。他の皆さんののはまた違う物が出てきます。ちなみにこの武器は、中学3年の成績に影響してます。勉強ができた人は、選べますができなかった人は固定武器です」

それから、主席番号順にDBBを作成していく。そこに

「あなたの武器強そうね」

と先ほど入ってきた緩奈さんが話かけてきた

「そうかな？」

と答えると

「私のに比べるとね」

とそこには、青い腕輪がついていた

「意味は、静かなる闘志よ」

とニコツと笑顔を作るとそこにムチが現れた！長さが4mもあるやつである。パシッ！と音をだして地面に落ちた

「どう？たいしたことないでしょ？」

みんなの視線が緩奈の武器に集中した

「いや・・・そっちの方が強いだろ！」

とそこにパン！パン！の音とともに何か飛んできた。それを緩奈が「危ないわよ」

と簡単に落としてみせた

「おにい！これが私の武器だよ」

と希想が白と黒の銃をこちらに向けながら歩いてきた

「オイ！殺すきか！」

ぶんぶんと勢いよく首を振ると

「おにい〜ならそれで落とすと思ったのな〜」  
と無理難題を言ってきた

「なんか期待はずれだな〜つまんないの」

とニコニコしながら曲狐が話しかけてきた

「なんだよ、全部落とせってか？」

「そうそう！」

と無理を普通に言ってきた

とそこに先生が

「皆さん、4人一組のチームを作ってください。これから練習試合をします」

と先生が言ったので

「この4人でいいか？」

と聞くと

「異議なしだよおにい〜」

「ないわよ」

「なしなし」

とみんな言ったので

「先生！この4人でチームつくります！」

「ならリーダーを決めてください」

と言われたがみんなの戦闘スキルも知らないのにどうすれば？と考  
えていると

「君でいいじゃないか、妄幻君」

サンセエ〜と二人も勝手に発言したため

「それでは、妄幻君よろしくね」

と先生にも頼まれたので断れなかった

「はい」

と答えた

それから

みんなの武器を確認した

まず、曲狐の武器は、フリウリスピア海軍用船上槍である長さは、2mもある

次に、緩奈は、ムチで4mある、特徴はムチの側面にダイヤモンドがちりばめられている

次に、希想は、二丁拳銃で白と黒の特徴的な拳銃である。弾数は、片方40発の合計80発である。

最後に、俺である1.5mある日本刀である特に特徴は、ないなんか、俺だけ特にないのだ

「俺リーダー務まるのか？」

『もちろん(よ)(だよん)』

と3人一緒に言い切った

「そうか・・・」

それから、グラウンドに移動した

「これより、クラスリーダー決め試合をおこないます。4人チーム5つと3人チーム2つでおこないます」

第一回は、鈴木チームVS佐々木チームの試合だった

勝ったのは、佐々木チームだった3人なのに5分で片付けた。

「早いな〜勝てるのか？」

と考えるともう一方の試合も終わった森野チームと金沢チームで森野チームの勝ちである。

「次だな、相手は野呂チームだな」

相手は、ランスと大剣の組み合わせである

「よし！こっちは、俺と祈芽羅が前で川奈さんと希想が援護な」

と言ったら

「私のこと曲狐ってよんでね」

そしたら

「私も、緩奈ってよんでかまわないわよ」

「わかった！いくぞ！緩奈、曲狐、希想」

試合が始まった

まず、敵の槍兵がものすごい勢いで攻めてきた

「避けて大剣をやるぞ！」

「うん！」



## 力とカタチ（後書き）

### 次回予告

違うクラスの新たな人に会う妄幻達  
この遭遇がどう未来を変えるのか？  
新たな仲間

## キャラ説明 その他(前書き)

今回は、キャラ説明と用語などです。

## キャラ説明 その他

### 用語

学校名 望標学園 (のぞしめがくえん)

### 腕輪説明

DBB (Delusion Battre Bracelet)  
の略

### 腕輪のカラー説明

色は、人の心を映したもの

黒

友や大切な人にたいする気持ちの大きい人  
ワインレッド  
赤

どんなことにも、あきらめない人

ワインレッド

特に気持ちは強い人

黄

みなに元気をあたえ勇気をもたらす人

白

みなに癒しをもたらし、すべてに平等である人

紫

夢をあたえ可能性をもたらす人

緑

心が純粹で恐れを知らない心のもちぬし

青

正義の心で悪を討つ正しい心のもちぬし

灰色

教師用であり、1.5倍強い

勉強ランク

これは、腕輪の武器に影響をおよぼす

Aランク

すべての武器が使える

Bランク

Aと同じだが攻撃力が落ちる

Cランク

近距離の武器のみで攻撃力が低い

Dランク

男子は、ナックルで守備力アップ(小)

女子は、短剣ですばやさアップ(小)

一年の場合は、中学の最終成績がランクを決める

二年の場合は、高一の成績

三年の場合は、高二の成績

留年生は、去年の成績で決まる

飛び級生は、特殊試験の成績

キャラ説明

主人公

徳岡 妄幻 (とくおかもうげん)

身長 170cm

年齢 15歳

性格 真面目

勉強ランクB

得意科目 英語、国語、数学、理科

腕輪カラー黒

意味 友のための犠牲

武器デザイン

日本刀

サイズ1.5 m

ヒロイン

祈芽羅 曲孤 (きがらみこ)

身長 160?

年齢 15歳

性格 少しぬけてる

勉強ランクC

得意科目

体育、地理

腕輪カラー

ワインレッド

意味

決意の証

武器デザイン

ヤリ(フリウリ・スピアー)

サイズ 2 m

徳岡希想 (とくおかきそう)

身長 155 cm

年齢 14歳

性格 騒がしい

勉強ランクA

得意科目

体育、保健以外

腕輪カラー黄色

意味

明るさ稲妻のごとく

武器デザイン

二丁拳銃

弾数 40発 二丁あわせて80発

川奈 緩奈 (かわなあやな)

身長 175cm

年齢 16歳

性格 ものしずか

勉強ランクA

得意科目 すべて

腕輪カラー青

意味

静かなる闘志

武器デザイン

ムチ

4m

教師

国語担当、1組担任 井口 野良 (いぐちのら) 20歳

学長 天皇 龍次 (すめらぎりゅうじ) 57歳

キャラ説明 その他(後書き)

次回 新たな仲間

新たな仲間（前書き）

「おはよ〜レンちゃん」

「レンちゃん言うな！」

「そっだよ〜ミレナ」

「なんで？奏ちゃん？」

「はあ〜」

## 新たな仲間

あれから、俺がクラスリーダーになった。

特にやることも無く平和な毎日・・・だと思ったのに・・・話は、HRになる

「後二日でクラス対抗試合が始まります。クラス委員長の妄幻君と副委員長の緩奈君、作戦を考えておいてください」  
俺は、忘れていた・・・。

「わかりました、考えておきます」

それで、今なのであるそこにはいつも？4人である

「おにい！どうするの？」

「そうだよ！考えないとマジやばいって感じになるよ」

と希想と曲狐が自分には、関係ないな！って感じて俺に聞いてきた  
「わかってるよ・・・緩奈！何か思いついたか？」

と聞いてみると・・・いなかった

「アレ？アイツどこいったんだ？」

二人は、知らないよ！と言って首を振ってしまっている

「あれって緩奈さんじゃない？」

と曲狐が自動販売機の方にいる緩奈を見つけた

「お！い！どこ行ってんだ？」

と駆け寄ると

「この子と話してただけだが？」

そこには、3人の女の子がいた

「紹介しよう。まずこの茶髪ポニーテールの子が藍沙佳夏連だ」

と茶髪ポニーテールの藍沙佳さんが

「はじめまして！夏連って呼んでな！」

と元気よく挨拶した

「次に、赤毛短髪の子が絹乱奏だ」

と赤毛で短髪の子が

「絹乱奏です。奏と呼んでください」

と奏さんが簡単に挨拶した

「最後に、アヴァン、ミレナ、フィルだ」

金髪に左右にある巻き毛が特徴である

「はじめまして〜ミレナって呼んでね〜」

と夏連に奏にミレナである

「はじめまして、一組の徳岡妄幻だ。よろしく」

と挨拶して他のメンバーも挨拶終わったみたいなので

「お前ら何組なんだ？」

ミレナが

「2組だよ〜」

「なら敵になるんだな」

そう言う

「正々堂々勝負しようね〜」

「もちろん！」

そこでチャイムが鳴った

「また、今度会おうね〜」

だが次会うのがあの日だとは、誰も考えてなかっただろう

国語だったが、頭に入らなかった

「おい、妄幻！P54を読め」

「はっはい！」

クラスのみんなから笑われた

それから昼までそんな感じだった

「おにい〜先生から総攻撃だったね〜」

と妹に背中をポンポンと叩かれた

「作戦会議をするぞ！」

「本気と書いてマジと読むって目だあ〜！」

昼食を食べながらの作戦会議が始まった

まず、遠距離が7人中距離6人で13人が近距離である

「無理わかんないよ〜おにい〜なんか思いついた？」

と妹が早くもギブアップ

「俺も思いつかない」

「私もむりかな」

「私もだ」

みんなりタイアであった

それから普通に昼をとり、雑談を始めた

「明日、放課後時間とってみんなで会議だな」

『さんせうい』

と二人は、同意

「私もいいわよ」

これで、みんな一致したため今日みんなに話すことになった

そして、HR

「みんな、明日の放課後残れる人だけでいいから作戦考えるの手伝ってほしい！強制じゃないから無理しないでいいから」

そして今日が終わった

## 新たな仲間（後書き）

次回予告

今日が作戦会議だ！

さて何人のクラスメイトが協力してくれるか  
クラス対抗試合の作戦会議

## クラス対抗試合の作戦会議（前書き）

みんな協力してくれるのだろうか・・・

## クラス対抗試合の作戦会議

さて今は、昼休みである

「今日は、何人来るかな？」

と3人に聞くと

「おにいーがみんなを信じていればみんなくるよ〜」

「私もそう思うよ!」

「うむ、そうだな」

とこんな感じである

そして6時限目が終わりHRである

先生が短めに話終わり いよいよである

掃除が終わりみんなが・・・席についたのだ!!

「おい!リーダー始めるぞ!」

と野呂が仕切り始めたので

「リーダーは、この俺だあ!勝手に仕切るなよ!」

黒板には、2組撃破!と書かれていた

「よします、役割を決めたい!」

そう、狙撃と中距離と近距離で分けて一気に叩くのが作戦である

「なのでまず、狙撃班のリーダーを決める」

勢いよく佐々木の右手が上がった

「俺つちにまかせな!」

「みんな、佐々木が狙撃班リーダーでいいか?」

と聞くと・・・拍手が起きた

「よし!佐々木任せたぞ!」

おう!と言いながら席についた

「次に中距離班リーダーだが・・・緩奈やってくれるか?」

そう、緩奈が一番強いしみんなが動いてくれそうなのだ

「いいわよ、みんなビシビシやるわよ?」

みんな、賛成したのでこれでOKである

「それじゃ、曲狐頼めるか？」

「妄幻君の方がいいんじゃないかな？」

みんなも同じ反応であったが

「俺は、総司令として先頭で戦うから曲狐に頼みたい」  
教室が静かになった

「そうだね　なら私がやるね！」

それで決まった

この後もいろいろあったがこれは、本番までの楽しみである

「よし！勝つぞお！」

『おー！』

## クラス対抗試合の作戦会議（後書き）

クラスの団結によりいい作戦ができた1組  
これで、2組を倒せるのか？

次回

試合開始！！

**試合開始！！（前書き）**

ーこれよりクラス対抗試合を開始しますー

試合開始！！

今、グラウンドである

これから、一年全クラスによる対抗試合である  
作戦は結構いい感じである

「みんな、相手は2組で俺たちより組み立てやすい武器が中心だあ  
！だけどあきらめないでいこう！」  
おー！とみんなが勢いがある声と重なるようにブーとブザーが鳴り  
響いた

「よし！行くぞ」

相手は、女子が14人で男子が15人の29人であるこっちより3  
人も多いのである

「試合準備を開始してください！」  
ざわざわとグラウンドに陣が構成されていく

「では、試合開始してください！」  
と合図と同時にブーと音が鳴った

「やるぞ〜！」「コード・トルネード」開始  
と命令とともに遠距離の弾幕と近距離部隊の突撃周りを中距離部隊  
が陣を作った

「ヤッホ〜幻！この作戦崩させてもらっからね」

「一人で騒がないでください、夏連」

と奏と夏連がものすごいスピードで陣を二つに引き裂いた  
「みんな！やるよ〜ついてきて〜」

とレイピアを持ったミレナの合図で大群が動き出した

「幻！メンバーの半分がやられたぞ！」

「安全な場所まで撤退してもう一回陣を作りなおすぞ！」  
だが、このときすでに後13人しかいなかった

「どつする？おにい〜」

・・・

「無視しないで答えてよ！」

「わかってる！わかってるよ！何も考えが思いつかないんだよ」  
「そうもう9人である」

『失望したのは、私たち突撃するから』

と曲狐と緩奈とクラスメートが突撃していった

(みんながやっているのに・・・俺は・・・俺は・・・なんで・・・  
また一人やられたただ、ただ  
どうすればいいんだ)

そのとき、曲狐が飛んだ

「キャアーーーーー！」

男子5人が迫ってる

隣では、男女20人に緩奈と希想が囲まれた

「も、もう無理」

「私も、だけどあきらめないで」

「俺なにやってんだよ！ー」

「仲間が助けをやる気のある俺を待ってるのにー」

「こんなところであきらめていいのかよー」

「選べよ！俺が選ばないといけない道を！ー」

「なんだ、アレ？なんだあれ？」

そこには、二本の刀と怒りに満ちた目が相手をマークしていた

試合開始!! (後書き)

次回

25人の生徒相手に一人で戦う妄幻

この後にある世界とは

BREAK!BREAK!BREAK!!!

**BREAK!BREAK!BREAK!BREAK!!!** (前書き)

そこには、貪欲なオーラがあった

**BREAK!BREAK!!BREAK!!!**

「妄幻なの?」

「おにい?」

「妄幻君?」

と三人が似たような反応をとっているとも  
ものすごい勢いでまず5人を吹き飛ばした

「何だ!?アイツ!」

オラーーーーっ!

と男達が向かってきた

次の瞬間

5人が倒れた

そして刀を軽く舐めて笑っている妄幻

「標的を発見・・・撃破する」

そして次々と撃破していく

「ちよつと!これどこのアニメよ!」

「こんな大逆転は、アニメだけにしてほしい」

ズシャーんと三人ごと倒した

そして妄幻は倒れた

「妄幻!」

「おにいー!」

「妄幻君!」

と三人が駆け寄った

ブーとブザーが鳴り試合は、一組が勝利した

(みんながやられる！)  
(俺が・・・俺が・・・\*\*を助ける)  
(絶対に・・・絶対に)  
(そしてみんなも・・・)  
(そしてこれからも！)  
(もう、迷ったりしない！)  
(絶対に！！！)  
(だから・・・証明する)  
(この戦いでえー！)

**BREAK!BREAK!!BREAK!!! (後書き)**

次回

戦いは、すべては妄幻の覚醒により手にした

そしてその後にあつた未来とは―知らない天井、みんなの笑顔

知らない天井、みんなの笑顔（前書き）

終わった|負け|勝利|どっちなんだ・・・

## 知らない天井、みんなの笑顔

倒した？2組を・・・

お前がやらないから――

そんなこと言われるのか

あいつら最後の最後まで戦ってたな

あの時俺の手に二本の刀と漆黒の服――まるで”悪魔”だな

「おい！幻が起きたぞ！」

鈴木がなんか騒いでいる

「幻妄君！」

と曲狐が泣きながら部屋に入ってきた。それと

「妄幻！」

「おにい〜！」

みんな泣いていた「ここは保健室？なのか

「おおげさだろ〜俺は元気だぞ？」

笑顔で答えた

「心配したんだからね！いくら学校のイベントでも――」

どンドン涙が出てきて話せなく曲狐

「今度、休日買い物付き合いなさいよ！」

と言われたので

「わかったよ〜行くから！泣くなよ！な？」

二人からの目線が怖い非常に怖い

「どうした？二人して」

「私たちも何かきいてもらおうからね！」

うんうん！と妹まで頷いてるし

「わかりましたよ〜ききますから怒るなよ」

とそこに

「妄幻君覚醒おめでとう」

「覚醒？」

「そう君の場合は、2本の刀と漆黒の服になる」と井口先生が説明してくれた

「私たちにもあるの？」

と妹が乱入してきた

「ありますよ、覚醒は3段階です。1回ごとにそのスタイルに固定されます」

「なるほどな」

と納得していると

「今日は、もう休みなさい疲れたでしょうから」

「はい、ありがとうございます」

そして今日を終えた・・・

知らない天井、みんなの笑顔（後書き）

戦いを終えた妄幻たち

これからなにが待っているのか？

次回、勝利、戦いの後に

勝利、戦いの後に（前書き）

「妄幻君・・・何があつたの？」  
「みんな・・・待ってるよ」

## 勝利、戦いの後に

ブーーーーー

戦いが終わった・・・妄幻君が変な力を使って25人全員倒した

「緩！妄幻が妄幻君が・・・」

もう止まらないよ涙が

「おにいたら大丈夫だよ！」

泣いてるじゃない想ちゃんやっぱり中身は、中学生ね

「曲狐泣かないの重症でも1ヶ月の入院よ」

冷静だな緩「なんであんなに冷静なんだろう」

「そう・・・そうだよ！曲狐元気いっぱいだよ」

無理してるわね

無理してるな、曲狐さん

「皆さん、妄幻君を保健室に運んでください」

とそこに

「さっきの何？」

「痛いな」

「強かったね」

と上から夏連、奏、ミレナである

「妄幻君大丈夫？」

「わからない」

「そっか」

「けど、妄幻君なら大丈夫だよきっと」

これから何があっても彼守ってくれるもの

絶対にね！

なんか・・・もしかしてこれが恋なのかな？

そっか、そっか

## 勝利、戦いの後に（後書き）

### 次回予告

平和な日常だったのもつかの間

またしても妄幻に試練が―

「私がいなくてどうなってるの!?!?」

消えた曲狐

曲狐?曲狐?曲狐―!

消えた曲狐（前書き）

「誰よアンタ達」

「.....」

「それ、DBB！何年よ！」

「.....」

ボス

「目標を確保」

## 消えた曲狐

あれからすぐに復帰してみんなと楽しくすごしていた

「おはよ！緩奈」

「おはよう、妄幻 希想」

「おはよ！緩奈さん！アレ？曲狐いないの？」

そっいつも俺たちよりも早く来るのだ

「まだ来てないようね」

「寝坊か？」

「そっかもね」

とそこに担任がきた

「HRはじめますよ座ってください」

「皆さんに大事な話があります・・・祈芽羅さんが何者かにさらわれました」

ざわざわと教室が騒がしくなった

「それって誘拐ですよね！？」

「はい、ですが相手から警察に頼らず自分たちの力で助けに来いとメッセージがありました」

確かにメッセージがあつた

「ならやるしかないですよね！場所は？」

「横浜の赤レンガ倉庫前です」

みんながまたざわついている

「うちのクラスだけですか？」  
と聞くと

「はい」

俺は、机をバンツ！と叩いた

「みんな！俺達で曲狐を助けよう！」

おー！とみんなが答えてくれた

「相手の戦力が不明だけど俺達にならやれる！」

そうだー！とみんなに気合が入ってくる

「決戦！横浜市！みんなやるぞおー！」

『オー！』

そして俺たちの第2回目戦いが始まった

そして放課後まで話は、持ち越しである

そして昼休み 食堂である

そこには、2組の夏連と奏とミレナ達と一緒に食べている

「えっ！みーちゃんが誘拐されたの！？」

「そうなんだよ〜こまってるんだよ〜」

「相手は、1組だけを指定したんだろ？」

と夏連が聞いてきた

「そうね私達しか来ないように指定したわね」

緩奈がそう答えた

「これは、1組の問題だからですかね」

「たぶんね〜曲狐さんをさらうなんて！」

上から奏と妹である

「とりあえず、助ければ問題なしだろ！」

そうだね〜とみんな納得していた

そして放課後である

「みんな明日が決戦だあ！」

気合入れて作戦考えるぞおー！」

『おー！』

作戦会議は、7時まで続いた

「よし！解散！明日にそなえて休んでくれ明日は、学校に6時集合な！」

『はい！』

そしてみんな帰っていった

「明日勝てるか不安だな」

「そんなに不安なの？」

と緩奈がやさしく声をかけてきた

「あんだだけ、言ったけど不安しかないさ」

「おにいらしくないな」

「希想」

そこには、妹がいた

「私達がついてるから安心したら？」

と緩奈がそして希想が

「ありがとな・・・よしっ！帰るぞ」

「そうね、お姉さんも疲れたし」

「りょくかい！」

そして俺達は、明日へ向かった希望と不安を抱えながら

## 消えた曲狐（後書き）

### 次回予告

今回の敵は謎の集団であるが曲狐のために勝利をつかめるのか

次回 決戦！横浜市

「いくぜえー！俺達に不可能はない！」

決戦！横浜市（前書き）

「彼らのどこがいいんでしょ？」

「知るわけが無い」

「アイツらには、可能性がある」

「そうですか、いつか我々の見方になる方もいるのでしょ？ね」  
「そだな」

## 決戦！横浜市

決戦——曲狐を助ける日

「みんな来てるな」

「いるわよ」

そこには曲狐以外みんないる

「みんな、バスに乗るぞ！」

みんな乗り込むと

「皆さん行きますよ」

『はい！』

そして1時間横浜赤レンガ倉庫である

「きたぞ！」

その言葉を合図に出てきた

黒い連中が数は、10人

「待っていたぞ妄幻」

中央の男がしゃべり始めた

「お前は、何者だ！」

「私は、コードネーム スパイダー お前らの学校の裏クラスX組

みりーダーだ」

ざわついた 彼らは俺達の学校の裏クラスX組み？

「俺達と同じ学校なのになんでだよ！」

スパイダーじゃない人が話し始めた

「我らの指導者の命令よ。私は、ローズよ」

ローズと名乗る女性が前に出てきた

「指導者って校長のことか？」

また違うやつが

「自分で調べな、俺はドルフィンだ」

次は、ドルフィン

「もうはじめよう話すのも飽きた」

そしてその言葉を合図に始まった

俺の武器は、二刀流の刀に漆黒のコートにラフな服である

「突撃！」

おー！とみんなが走っていった

「10人私がやる」

とローズが

「俺は、3人」

ドルフィン

「我に続け残りをやる」

スパイダーと7人

「スパイダー！俺が相手だあ！」

「いいだろう」

今の現状は、ローズに希想をリーダーの10人

ドルフィンに野呂と鈴木と斉藤の三人

残りのX組みに緩奈をリーダーの12人

スパイダーに俺である

「まだ力を出し切れていない」

「俺は、いつでも全力だあ！」

周りに巨大な穴がボコボコ空いている。悲鳴も聞こえてくる

「なんで一般人のいるところを選んだ！」

「それは、指導者に聞け！」

「また指導者かよ！アンタ！」

それから2時間他のところは相打ちだったり負けたりしたところもいた

だけど相手は、残りスパイダーだけである

「これで残りは、お前だけだな」

「そうだが？」

これで最後までどうしても一撃必殺ができない

「感情を高めてみる」

いきなりスパイダーがアドバイスを言ってきた

「なんだよ！アンタも限界か！」

「そつだな」

感情を高める――曲狐を助けたい、いや！助ける！

「これで終わりだ！腕輪の意味を理解したよ！」

周りから貪欲な黒いオーラだが邪悪ではない、優しい黒である

「いいだろうこい！」

周りが吹き飛んだレンガが剥げ何もかも破壊した

そして雨が終焉を知らせた

## 決戦！横浜市（後書き）

次回予告

戦いは終わったすべては、光の中

次回 雨 終戦の後

一組には可能性がある育つか、育たないか楽しみだな

雨 終戦の後（前書き）

ザーーーーー

無残に壊れた赤レンガ倉庫

そにいてるのは？

## 雨 終戦の後

そこに俺は立っていた

仲間、安全装置が起動したおかげで無傷である

「勝ったのか？」

ザーーーーー

「貴様は、力を使うことができた」

どこからか、スパイダーの声が聞こえる

「だがまだ100%ではない」

どこからなのかわからない

「これからの活躍に期待しているぞ」

みんなが倒れている

「人質なら近くの船の中で寝ているぞ」

そこには、小さなヨットが停泊していた

「曲狐ー！」

ヨットに近くに行くとそこに寝ていた

「大丈夫みたいだな」

目を覚ました

「妄・・・幻？妄幻！助けに来てくれたの！？」

と涙を流しながら抱きついてきた

「みんなと一緒だ！」

そしてヨットから出ると

「みんな大丈夫なの？」

「もちろん！安全装置が効いてるからね」

そこに先生が来た

「みんなを車に乗つけて帰りますよ！」

それから10分ごみんなを乗つけて

「みんな乗ったな・・・ヤバイ！警察が来るかも！先生車出して！」

そして学校に着いた

「みんなを保健室に運んでください」

「はい」

そして運び終わり曲狐と二人きりである

「ありがとうね！」

「俺達の仲間だからな！」

夕日がやけに綺麗にみえた

「それでも嬉しいよ／＼／＼／＼これお礼ね」

チュツと頬に暖かい感触がこの日が忘れられない日になった

「おっお礼なんだからね！」

ぼくとしていると

「行くよ！妄幻！」

「おっおうー！」

## 雨 終戦の後（後書き）

### 次回予告

今回は、なんとか助けられることができた

だが、今度はうまくできるか心配だな

それもだが次の相手は、教師だ勝てるのか？

VS 教師

やるぞ！教師なんて楽勝だ

## V S 教師（前書き）

「校長先生！本気ですか」

「俺が嘘ついたことあるか？」

「………無いです」

「第1回生徒VS教師！」

## V S 教師

あのX組との戦いから1週間がたった

新聞やニュースですごく報道されていた

「赤レンガ倉庫前です！このように無残な姿になっています」

とレポーターの後ろでボロボロになっている赤レンガ倉庫が映っていたりした

こんな感じで1週間ですごした

そしてまた一つイベントが発生した本当に飽きないクラスである

「今回、初めての生徒VS教師をやると校長先生が企画しています、やることになりました」

クラスが静かになって誰か話せよって感じの空気になった・・・なので

「先生！それ本当ですか？」

「本当です」

それに続いて緩奈が

「いつ戦闘ですか？」

たしかにそうである、俺達は最近戦闘が多く疲れている。

「明日だそうです」

みんなが固まった・・・そうだろう、生徒のこと無視な予定なんだから

「作戦考えておいてくださいね。私も敵なので今回は、参加しませんから安心してください」

それだけ出していった

「どうするんだよ！相手は教師だぞ！」

「たしか私達より1.5倍強いらしいわよ」

「マジで!？」

「勝てないよ！そんなの！妄幻君！何か作戦ないかな？」

「そうだよ！おにいーは、リーダーなんだから！あるよね？さ・く・

せ・ん」

みんなの目線が俺に集中した

「すまん・・・無理です。今回は何にも思い浮かばない」  
「クラスのみんなが『だよな』とがっかりしていた

「まず！力の差が酷過ぎる！それに相手は、俺達が暴走したら止めるために訓練もしてるはずだ」

「そうね〜そのくらいは、覚悟しとかないとね」

うんうんとみんながうなずいた

「だけど、だけ〜ど！私達はX組に勝てたんだよ！」

そう俺達だけで一応勝った（？）のであるそう考えると案外簡単かもしれない

「みんな！作戦は、初戦で使ったやつを使う！だがうまく臨機応変に行動してくれ！後今日は、居残り禁止！早く帰って寝ること！いいいな？」

『了解！！』

そして俺達の作戦が決まり日常に戻っていった

昼休みー食堂であのメンバーが集まった

「で？アンタ達は、明日先生達と戦うのよね〜ガンバ！」

「簡単に言ってくれるな〜夏連」

「だって関係ないしね！」

『そうそう』

と三人娘達は、こんな感じなのである

「まっ妄幻達ならやれるでしょ？あの誘拐の犯人倒したんだし」

そう倒したーいや訓練されたが正しいのかもしれない

「そうだな・・・やるだけだよな！」

「そうそうー！」

とこんな感じで昼を過ごした

そして本番である今日の前には全9人の先生が並んでいる  
そして中央に校長が腕を組んで立っている

隣には、幅が大人一人分ぐらいのデッキカキ剣が地面に刺さっている  
長さは4mである

他の先生を見ると

一人両手にガトリングを構えてる先生がいるあれは、杉岡先生である  
うちの担任は、巨大過ぎるハンマーを持っている・・・某戦闘機が  
人型になり歌が勝利を導いたりするアニメに出てくる巨人がもつ  
てそんなものである

「担任異常だろアレ」

みんなの顔が真っ青になっている

「これより1組VS教師の試合を開始します・・・試合開始！」

俺達は、うまく展開したつもりだったのに担任の超巨大ハンマーの  
一振りでみんな飛んだ

「まだまだですね」

そして仕方ないのでX組との戦った時利用した作戦でやることにした  
「作戦Xに変更！」

あの時と同じでリーダーと一騎打ちである・・・そう長さ4mで幅  
2m以上の剣を構えた校長に

「よう！妄幻！元気あるか？」

と笑顔で聞いてきた

「元気過ぎて大変だぜえ！」

それは、イイネ〜と言ってその剣を一振りしたその瞬間！嵐が起きた  
俺は、20m飛んで校舎の壁に激突した

「もう終わりか？」

校長がつまらなそうに問いかけてきた

「まだ、本気なんてだしてないんだぜえ！」

と言ってあの時みたいに全体に貪欲なオーラをだし力を全身に均等  
に与えていく

「すごいね〜若いからできるのかね〜」

そして突撃したあの剣を素手で受け止め投げた2本の刀を先生に向  
けて蹴った！

瞬間、担任の巨大なハンマーが直撃した！普通なら4m以上飛んでるはずだが曲狐が先生の横腹を刺し緩奈が先生のハンマーを押さえつけたそして俺の刀の一本がハンマーに当たり砕けたそしてもう一本を改めてまた蹴りなおした！あの時は、2本を別々に蹴っていた一本を空中にそしてもう一つを先生にであるそして説明前の場面である

「やるじゃねーか妄幻！」

そしてブザーが鳴った

そうリーダーがやられたからである

「合格だあ！一組！貴様達を1年代表として正式に任命する！」

そしてまた一つ戦いが終わった

## V S教師（後書き）

### 次回予告

教師を撃破した妄幻達一組に新たな試練が近づいていた

次回、占拠された学園

どうなるのか・・・一組の活躍に期待

キャラ説明 その他 ? (前書き)

キャラ紹介などです

## キャラ説明 その他？

### 教師

国語 井口野良 (のぐちのら) 20歳 男性

数学 原岡本木 (はらおかもとき) 40歳 男性

社会(地理) ノ呂原リヨウ (のろはらりょう) 30歳 男子

理科 杉岡林 (すぎおかりん) 20歳 男性

英語 ジョン・クロス (じょんくろす) 50歳 男性

体育 雪村真 (ゆきむらしん) 50歳 男性

保健 坂岡美ノ (さかおかみの) 30歳 女性

副校長 磯辺薫春 (いそべつたはる) 55歳 男性

校長 天皇龍次 (すめらぎりゆうじ) 57歳 男性

### X組

男女10人で構成されている

全員OBで校長の命令で動く

DBBは、教師の0.5倍強く設定されている

このクラスは、校長しか知らない

メンバーは、全員コードネームで呼ばれる

|       |     |     |     |     |    |      |       |     |       |      |
|-------|-----|-----|-----|-----|----|------|-------|-----|-------|------|
|       |     |     |     |     |    |      |       |     | リーダー  | メンバー |
| サファイア | パール | ルビー | ダイヤ | ジョン | サム | キャット | ドルフィン | ローズ | スパイダー |      |
| 女性    | 女性  | 女性  | 女性  | 男性  | 男性 | 女性   | 男性    | 女性  | 男性    |      |

キャラ説明 その他 ? (後書き)

それでは、占拠された学園

## 占拠された学園（前書き）

「この学園にある機械をまらじとする」

## 占拠された学園

あの先生方からの無理やりのバトルを終え3日がたち俺達の傷が癒しが終わったころにまた問題である

そう校内放送から始まった

「この学園は、俺達ロツクが占拠した。もし反抗したらここをC4による爆破をおこなう！解除しようなんて考えるな数は、1万ある」  
クラスがざわついている！早く止めないと問題が起きる！

「みんな！落ち着くんだ！」

まったく聞いてない

「黙れえー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

バゴオン！と机をすごい勢いで破壊した。その机が吹っ飛ぶほどの力で

「よし！黙ったな・・・みんな聞いてくれ今回はみんなにC4の解除をしてほしい！」

そして先生が続いた

「皆さんのD B Bには、いろいろな状況にも対応できるように知識を与えてあります！それを使って対処してください」

その時俺は、なぜかアイツの名前呼んでしまった

「緩奈！お前は、俺と一緒に敵の無力化するぞ！」

みんなもビククリしていた

「いいわよ やりましょう妄幻」

それでは頼みますと言って俺と緩奈は、走りだした！

「前方に二人・・・いけるか？」

「これで18回よ そろそろ覚えなさい」

そう確実に相手を潰しながら30分近く進んだ

相手の武器は、P90とAK47の二種類である

「ずいぶん装備が普通ね」

「そうだな、特にAK47なんて古くないか？」

「そうよね〜レトロ口好きなのかしら？」

さてこれで40人である

ここまで以外にも簡単だった

とそこに敵の指揮官？らしき人が現れた

「動くなつてボスの言うこと聞いてなかったの？」

「そうかもな」

「なら死になさい！」

両手にガトリングにセントリーガンを左右に展開されていた

「終ね！」

目を瞑ってしまった！だがいつになつても弾がヒットしてこない

目を開けると煙をあげた銃と巨大なハンマーに潰された女性がいた

「大丈夫ですか？妄幻君と緩さん」

『先生！？』

「無事みたいですね」

そう井口先生である

「その武器なんでもてるんですか？」

「DBBだからですよ」

「なるほどね」

となごんではいると

「C4は、解除完了しましたから。職員室に行ってください」

「わかりました」

職員室に行くとき先生達が縄でぐるぐるにされていた

「よ！犯人グループのリーダーさん！」

「なぜ？ここに生徒がいる？C4を爆発するぞ！」

「解除済みよ」

犯人がガトリングを向けてきた

「馬鹿だろアンタ？」

「大人をなめるな！」

ダダダダダダダアアアアアア！！！！

放たれた弾丸はすべて落ちた妄幻の刀により

「駄目だぜんぜん駄目だ！遅すぎるぜえ！」  
そして緩奈が縄を破壊し犯人を確保した

## 占拠された学園（後書き）

### 次回予告

犯人を捕まえ学園を救った妄幻達

その後二人にしんてんがあったりなかつたりそれは、貴方の目で確認してください

勝利その先の褒美

勝利その先の褒美（前書き）

「解決したな」

そうここは、学校の廊下である

そして隣には緩奈である

## 勝利その先の褒美

犯人を逮捕して事情を聞くとお金が欲しくDBBの製作機械をいただく作戦だったらしい

「生徒がC4を解除できるなんて知らなかった・・・普通ならプロじゃないとできないのに」

凄いガツカリしているところに校長が

「DBBは、いろんな生徒をプロに変える凄い腕輪だなめるなよ！そして警察につれていかれた

「よし！ご苦労だったな」妄幻に緩奈！

と校長に頭をガシガシされた

「痛いですよ！」

「だけど、なんで先生が動かなかったんですか？」

と緩奈が聞くと

「俺達は、犯人の前だから動けば刺激するからな」

そうか」と二人で納得していると

「すまんこれから警察にいろいろ話さないといけないからまたな！そして走って行ってしまった

「ありがとな！緩奈がいなかったらここまでうまくいかなかったよ」

「いいのよ、別に一人じゃここまでうまくいかなかったわよ」

なぜか顔を少し赤く？したような感じになっている

「そうなのか？ならなんであんなに上手くいったんだ？」

なぜか呆れたようにため息をさせてしまった

「なんだよ俺変なこと聞いたか？」

なぜか笑っているし女は、よくわからない生き物である

「それにしても妄幻は、鈍いのね」

「鈍い？俺が??」

「そうよ、あなたは鈍い」

どこかでミスしたのか？いやしていないはずなのに

「どこら辺が鈍いんだ？」

またため息だ

「自分で考えなさいよ」

なんか意地悪な顔をしてきたので

「教えてくれよ」

その時曲狐と希想が走ってきた

「仕方ないわね・・・ヒントよ」

キスをされた頬にである二人の顔が赤くなってもものすごいスピードで接近してきた

『ちよっ！チヨット何キスしてるのよ！！』

「ヒントあげたからね」

「おっおう！」

「無視すんな！」

そうこんな感じで終わったのであるだがまだ試練がまっていた

## 勝利その先の褒美（後書き）

### 次回予告

事件事件で大変だったがまだ試練が残されていた

「みなさんテスト忘れていませんか？」

「え〜！」

「なので次回は、テストです！がんばってくださいね」

「最悪だあ〜」

テスト（前書き）

終了です回答を回収します

## テスト

俺達の地獄が終わった

「疲れた〜なんでこんなことに」

「そういまHR終わりである」

「だけど今回は、化学と国語と英語だけだからまだましでしょ？」

「そう俺達のテストは、くじ引きで決まる」

「校長がくじを引きそれで出てきた科目がテストになるのだ」

「だけど難しいな〜特に化学」

「そこに希想と曲狐が合流した」

「ねえ〜化学のベンゼンの化学式って何？」

「と曲狐が聞いてきた」

「C6H6が正解よ」

「と緩奈が簡単に答えた」

「さすがだな〜」

「Aランクは、伊達じゃないわよ」

「そしてまた曲狐が質問してきた」

「なら、これ教えて！」

Ne Ga H O P o I Na を原子量の小さい順に並べ

るやつ！」

「それは、H・O・Ne・Na・Ga・P o・Iの順番だな」

「違うよ〜IとP oが逆だよ〜おにい〜ドンマイ」

「と笑われたなら俺1点損した」

「マイナス1点だね妄幻君」

「次これ！これって何？」

「プリントには、長いプラスチックの筒が写っている」

「そうあの誰でもわかるあの物である」

「メスシリンダーだろ？」

「そうね〜」

『まさか答えられなかったの?』

「……テへ」

「よし次だ!次だな」

「なら国語!これ教えて

相殺つてなんて読むの?」

「そうさいだよ」

と普通に答えると

「取引の利益で借金を相殺する 例文としたらこれが簡単だね!」

「例文は、書けたのに読めなかった」

なんかこれは、まるで カ スだな

「なんでそうなるのよ?」

「わかんない」

さてここまでくれば分かると思うがそう曲狐は、馬鹿なのである

「英語教えて!」

そしてプリントを見せてきた

「スペイン語を英訳せよね〜たしか……spanishだよな?」

「そうね、正解よ」

「なるほど〜そう書くのか」

と曲狐が納得していたため

「どんな感じに間違えたんだ?」

「spanishって書いた!aとuを書き間違えたみたい」

と凡ミスだったので意外だった

あとあと〜といいながら次の問題を探しはじめた

「これ!This is the book she left that my gr

and r n o t h e r h e r h a d u s e d r e g u l a r l y t

てなんて訳すの?」

「俺パス!緩奈〜頼む」

ため息をつきながらはいはいとしぶしぶ答えてくれた

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。が正解よ」

へ〜と言ったと思うと

「これから遊ぼう!」

『はい?』

なんて言った?遊ぶ?曲狐は、あんなにできてないのに?

「いいけど、どこにだ?」

「もちろん・・・商店街!」

そして俺達は、近くの商店街を目指して坂道である桜並木を走っていった

「とうちゃーく!まずゲーセンでプリでしょ」

そして中に連れ込まれた

「いろんな機械があるんだな」

関心していると

「こつちだよこの機械オススメだよ」

となんか無理やり押し込まれた

「みんな、笑顔だよ笑顔!」

と3人が凄い笑顔なので俺も負けずに笑顔を作った

そして撮影終了して落書きタイムがあるみたいだが3人に任せることにした

それからいろいろ見て回った

「もう6時だね」

「そうね、なら解散ね」

「また明日な!」

「そうね!」

これで今日が終わった

## テスト（後書き）

### 次回予告

「おにい〜ご飯なに〜？」  
そここの話の後話である  
兄、男としての振る舞い

兄、男としての振る舞い（前書き）

ようしおにいゲット作戦スタート

## 兄、男としての振る舞い

あの後俺達は、家に帰り今から飯の準備である

「希想〱風呂準備してくれ！」と妹である希想を呼ぶと

「は〱い！おにい〱今日のご飯なに？」

と聞いてきた

「今日は、パスタだよ…ってなんて格好してるんだ!？」

妹が凄い格好をして出てきた

露出度が高いのである

「何？どうかした？」

と何も無いような感じなのであるまったく困った妹である

「もう少しどうにかできないのか？」

「えっ！おにい〱は、これで満足できずに私に裸体になれと…」

と変なん妄想が妹をおかしくしているようなので

「とりあえず風呂よろしく」

は〱いとなんかガツカリしながら風呂の準備に行った

それから妹は、部屋に戻り俺の料理の完成を待たらしい

「希想、食べるぞ」

と呼んだら

「は〱い」

また部屋から登場

「おい！妹よ…何故露出度が上がったんだ？」

「そうかな？気のせいだよ！」と完璧に露出度が上がった格好をしている妹がいた。

ちなみに、上が肩まで露出したダボダボの服に超ミニスカートである。

「早く食べようよ」

と上目遣いで見てきた、その時知ってしまった…妹は、ノーブラであることを

「そ、そうだな！食べるぞ〜」そう、俺は男としての振る舞いを試されているのだと思った。「相変わらず美味しいよね〜おにいの料理」

などと言いながらも胸を少し強調している…無い胸を頑張って「そうか〜たしかに頑張ってるから少しは、マシなはずだからな！」

さて今妹は、風呂であるだがまた

何かやられたらやっかいなので「さっさと風呂入って寝る！うんこれが一番だ」

そして妹が現れた！下着にバスタオルである

「おにい〜「よっし！風呂に入って寝よう」

おにいに逃げられた…

このままであの二人におにいがとられちゃう！

「どうすればいいかな〜」

気がつくとも朝になっていた

ちゃんと服も着てるし自分の部屋である。

「おにい、やっぱり好きだな」

## 兄、男としての振る舞い（後書き）

### 次回予告

クラスで委員会決めたところで俺は、風紀委員をやることに！？  
風紀委員の妄幻

風紀委員の妄幻（前書き）

さて始めるかなぐれんどいな

## 風紀委員の妄幻

今回クラスで一人風紀委員を決めないといけなないので俺が立候補した  
「妄幻頑張つてね」

「おう！行つてくる」

と緩奈に応援されながら向かったのだったさて俺達一年は、二クラスなので二人である。

「よっ！夏連」

と前を歩く二組の藍沙佳夏連に声をかけた「！！なんだ〜幻かよ」と凄く驚きながらこちらを向いた

「なんだは、ないだろ？」

とか話していると始まった

「この風紀委員の担当は、私だ」

そう校長なのである

それからいろいろと1時間も話しを聞かされやっと打ち合わせである。もちろんパートナーは、夏連である「そっちなんか問題あるか？」と聞いてみると

「幻の方こそ」

「ない（わよ）」

「だよな〜」

俺達のクラスでの問題は、無いのであるさてどうするか

「最近どう？」

「特に無いな〜俺達は、事件が終わるとのんびりしてるしな」  
「そうと簡単に返事をされた」

「そっちこそないのかよ」

「問題なんてあの爆弾事件ぐらいよ、そっちみたいに問題多くないよ」

「そつだろつな〜俺達が異常なだけだよな…」

「よし！今日は、ここまで！解散」

この言葉により今日のやることを終わった「そっちなんか問題あるか？」と聞いてみると

この言葉により今日のやることを終わった

「あんたこの後暇？」

「いや、妹の飯を準備する」

「大変ね〜そんじゃ！」

と二組に走って入っていった

「さて帰るかな〜今日は、グラタンでいいかな」

## 風紀委員の妄幻（後書き）

次回予告

風紀委員の仕事を終え一人家に帰った

一人飯

よし！今日は、楽だな

一人飯（前書き）

さて楽しむかな

## 一人飯

さて現在午後6時30分

家には、俺一人なのである

「飯弁当でいいか」

そう今日は、妹がいないのである。

これは、放課後のことである

今日は、曲狐さんの家に泊まるから

らしいてか泊まるなら何故先に連絡しないんだ！

俺は、今家の前そしてコンビニは学校の近くにある20分かかる距離である。

「希想！覚えてろよ〜！」

と叫びながらコンビニまでダッシュした

息を切らしながらいえに帰り風呂は、シャワーですませ弁当を食べた

「普通にうまいのがムカつく」そして宿題を終わらせ暇なのでPP3を起動した

「ゲームやるかな〜」

ソフトは、過去にでたシューティングゲームの召集編らしいだがすぐ飽きてしまう

次にグランツーリスモ40をやることにした

「全部クリア済みだったんだな〜」

そう、家にあるほとんどのゲームは、クリア済みなのである

「今まで起きた事件って校長がやったのか？」

X組の存在

指導者

「何が起きてるんだろ〜俺の頭じゃ理解できねえ〜」

だが一つ解ることがある

「これは、一組を狙っている」そうこれ以上の答えがあるだろうか  
いやない

「みんなにももつと武器を使えるようになってもらわないとな」  
時計を見ると10時を過ぎていた  
「寝るか、明日も学校だしな」

一人飯（後書き）

次回予告

社会見学の班決めのために熱いバトルが起こる！  
女の戦い

女の戦い（前書き）

『妄幻（君）（幻にい）は、私と行くの！』

## 女の戦い

さて今は、6時限目である

社会見学の班決めでまだ2つの班が決まってないのだ

「妄幻君とは私が行くからあなた達で班になりなさいよ！」

と曲狐が発言すると

「あなたはこの子と行ってあげなさい、私が妄幻のパートナーになるから」

と緩奈が反論して最後には

「私をお子様扱いするなー！」と希想が怒るこれでもう30分使っている

「先生どうします？これじゃ決まりませんよ」

と先生に助け船を求めると

「なら、DBBで勝負して勝った人が妄幻君と同じ班でいいかな？」

「いいわよー！二人まとめて倒してあげる！」

「あなた、自分の成績考えたら？」

「普通に考えたら無理でしょ！」

と二人から攻められる曲狐

「なら、無理じゃないこと証明してあげる」

そして場所変わりグラウンド

「緩奈さん！先に曲狐さんを片付けませんか？」

と交渉をもちかける希想

「いいわよ、先に片付けましょう」

何故か曲狐とアイコンタクトしながら答える緩奈

「それでは始めます！バトルスタート！！！！」

その瞬間！緩奈の鞭が希想を捕まえた

「は、話が違っわよ！」

と状況把握が間に合わない希想に優しく説明を始める緩奈

「あなたを残すと後が面倒だから先に片付ける事にしたの」

と話終わると同時に槍がもの凄い勢いで飛んできた

「そんじゃ！お休みだね」

まず一人ダウンした

「こっからが本気の勝負よ！」二人が間をとり仕切りなおし

「さて本気でいくよ」

「どうぞ」

曲狐が突然してきた！だか

「遅い」

鞭により妨害され吹っ飛んだ

「もう終わりかしら？」

立ち上がった

「ま、まだ！まだやれる！」

そして構え直して、凄い勢いで飛んだ！光の線のようなものにみえた

「っ！追いつかない！！！」

その一撃により緩奈が敗北した「勝者！曲狐！」

やったあゝともの凄い勢いで抱きついてきた

「一緒に楽しもうね！」

と凄い笑顔だった

「そうだな！」

これにより全部決まった

## 女の戦い（後書き）

### 次回予告

今回は、横浜の社会見学である破壊した赤レンガがどうなったか  
社会見学その1

社会見学その1 (前書き)

今日は、私が妄幻を独占できる

## 社会見学その1

現在俺達は、自分達が壊し他人に修理を任せた赤レンガにいる「ここまで修復したんだな」と主犯である俺が言うと

「これにとどめの一撃やったのおにいとスパイダーだもんね」と妹に言われ

「安全装置が起動しなかったらどうなっていたかしらね」と緩奈まで俺を責めるのか!

「二人とも落ちついて、私は感謝してるかね」

と唯一の見方が現れた!

「ここらは、自由行動です。各班に別れて行動してください」と先生の一言により俺達一組が行動を開始した

「まず、赤い靴を履いた少女像のある公園いこ!」

「いいぜ」

いきなり曲狐が手を組んできた「お、おい!は、恥ずかしいから止めてくれ!」

だが曲狐は、わざとか本気なのか逆にもっと密着してきた

「どうかしたの?」

と真顔で聞かれたため

「腕組むの恥ずかしいから止めてくれないかノノノ」

そしたら

「だ、ダメ?」

と涙目になった!女性は、卑怯である

「いや、いいよこのままで」

「やった 行くよ妄幻君!」

そして着いてみると散歩している人や休んでいる人が多数いた「アレのことだっけ?」

「そうだよ 意外に小さいね」

たしかに、イメージより少し小さいのである

「さて、ここで休んでから行くか？」

「そうだね！」

近場の芝生に座り海をみていた「今まで起きた事件どう思う？」  
曲狐が考えながら話した

「私達を狙った犯罪それにX組の存在怪しすぎるね」

「もしこれが、校長がやったとしたらどう考える？」

凄くビックリしたらしく曲狐は、黙ってしまった

「俺考えたんだ、X組があそこまで動けるのって校長が何かしてるからだと…それにDBBを使っていたし」

腕を強く握ってきた

「その考え私も同じだよ！だってあんなに事件が重なるなんてありえないもの」

それに…と言葉を詰まらせた

「どうかしたか？」

「それに、まるで私達を鍛えてるように見えるから絶対に怪しいよ」と真面目な顔ではつきりと言ってきた

「そうだな…もう少し証拠を集めてから行動しよう」

「うん！」

急に眠くなってきた

「すまん、少し寝るな」

ヤバいもう限界に…

「チョット！寝たの？本当に？これって膝枕だよね！？」

そう手を握っていたのでそっちに倒れたのである

「仕方がないな〜お昼までだからね」

## 社会見学その1（後書き）

### 次回予告

寝てしまった妄幻と膝枕をしている曲狐さてお昼からどつなるのか  
社会見学その2

社会見学その2（前書き）

「そろそろ起こすかな」

## 社会見学その2

あれから2時間ぐらい私達はゆっくりしていた

「妄幻君、起きてくれるとたすかるかな？」

と頬をつつくと

「い・・・今何時？」

と目をゆっくりと瞬きをしながら質問してきた

「え〜と11時30分ぐらいかな」

「2時間ぐらいか？・・・って！俺何かを枕にしてか？」

「私の膝だよ」

口をポカーンと開けたまま黙ったと思ったたらあたふたし始めた

「えっ！膝痛くなかったか？」

「ぜんぜん痛くないよ」

「早くお昼食へに行くよ！」

と手を引いて走っていった

「どっどこ行くんだよ！？」

「ランドマークだよ！」

そして約30分かけてランドマークについた

「まず〜モクデーでご飯にしようか」

「わかった！」

そしてMが目印のバーガーショップに向かった

「ダブルビーフ！これ好きなんだよね〜」

「俺は、トリプルフィッシュが好きだな」

それから俺達は、次に見るところを決めて進むことにした

「どこか行きたいところあるか？」

「とりあえず〜最後に観覧車に行きたいな〜」

なら残り3時間だな

「なら見て廻るぞ！」

それからいろいろ見ていると

「この雑貨屋みてもいい？」  
「いいよ」

そしてなかをみると曲狐の好みにぴったりな感じである  
「これ可愛いな〜あつても高いから無理だな〜あつ！」  
後ろから取り上げた

「これ欲しいのか？」

「うん・・・けど高いから無理なんだよね〜」

確かにマグカップで3500円

「なら買ってやるよ！」

俺の財布には2万ある

「えっ！？でも高いよ？」

「大丈夫だよ！」

さてレジに向かい会計を始めると

「プレゼントですか？」

と曲狐を示しながら

「そうですね〜ラッピングお願いできますか？」

「では、やりますね」

会計が終わり曲狐のところに戻り

「ほら！」

渡すと

「ありがとうね」

とこんな感じでそろそろ観覧車に行かないとまにあわない

「走るよ〜！」

「ちよっ！待ってくれよ！」

10分間走をしてやっとなつた

「乗るよ〜」

そして少したつと

「私ねその〜・・・」

「どうかしたのか？」

「妄幻君のことその〜」

なんだろ〜マジで分からない

「す、す、好きなんです!」

沈黙

「はい?」

理解できない俺のことが好き?

「もしかして好きな人いた?」

「いやいないけど考えさせてくれ!」

ここで答えをだしていいはずがないと本能が止めてくるからである

「いつになるか分からないけどちゃんと答えだすから」

「いいよ! 妄幻君が準備できてないのも当然だしいくらでも待つよ」

そして集合ポイントに行った

## 社会見学その2（後書き）

次回予告

さて私達の話ね

幻ガールズにいくを一人独占なんてずるいな  
女達パーティーの行動

女達（ガールズ）の行動（パーティー）（前書き）

「予定ど通りに頼むな」

「わかっている」

## 女達（ガールズ）の行動（パーティー）

「行くわよ」

と一人勝手に進む緩奈

そしてそれを追う希想

「どこ行くの？てか歩くの速すぎ！」

希想の声を無視して喫茶店の前で止まるとそこで希想の方を向いて「ここでゆっくりしましょう」「まるでドラマなどに出てきそうな作りの喫茶店に緩奈が入ってしまった

「待って〜」

店内はよくドラマに出てきそうなマスターがいる落ち着いた感じである

「マスター久しぶりね」

「そうですね…いつものですか？」

「そうよ」

なんと二人は、知り合いらしいまっ緩奈が常連でも違和感がないが

「カプチーノありますか？」

「ありますよ…」

「ならそれで」

渋い感じのかっこいい系のマスター映画にでて違和感がまったくない感じである

「ここでゆっくりしたら次どこいくんですか？」

「気分によるわよ」

緩奈的には、どこに行くなんてどうでもいいみたいなのである「できたぞ」

マスターが二人に注文したコーヒートカプチーノを二人の前に置いた。凄くいい匂いがする

「美味しそうーいただきました！」と希想が目キラキラさせながら飲んでいると

「この前派手にやりましたね」新聞の記事を見ながら緩奈に話かけてきた

「あれね…友が人質にされて委員長が暴走したのよ」

「敵の情報必要か？」

「瞬空気が固まった」

「どこから手に入れたのかしら」

「いるのか…いらんのか」

マスターが敵か味方なのかここをミスすると相手に情報を与えるかもしれない

「鮮度」

「3日」

味方なのか…敵なのか

「高いのかしら？」

「無料」

コーヒーを一口飲んでから…

「ならもらうことにするわ」

マスターがゆっくり椅子座るそして語り始めた

「相手は、OBである。そして指導者が不明だが男性である。今の在校生からも新たに増える確率があるのである」

なら皆、先輩になる

その先輩が何故私達に？

指導者の考えがよめない

「もし、そのX組に入るとしたらどんな人なの？」

「クラスリーダーがよくなると聞いている」

「！！なら妄幻がなる確率が一番高い…私は一番目になるのね」

「幻にいがなるかもしれないの！！」

希想がもの凄い勢いで立ち上がった

そんな中二人は、冷静であった「可能性の話しなんだから落ちついて」

「だって、だって！…」

「落ち着いた判断ができない人は、奴らに負ける」

希想の言葉を止めたのは、マスターからのきつい一言だった

「相手は、プロで君達は、アマチュアだ。冷静をなくしたらどう戦う」

マスターの言ってる事に間違いなんて無い。

「なら、冷静な判断を使っておにいを助ける」

その強い意志のこもった発言とともに流れる涙止まることを知らないように流れ続ける

「わ、私絶対に…絶対に！おにいを日常から出してあげないんだからあー！」

それからずっと泣き続けていた気がつくのと夕暮れになっていた「さあ、合流時間まで後5分よ急ぎましょ」

「えっ！だけでもまだお会計済ませてないよ！」

と慌てる希想そこにマスターが「もう済んでる。行ってこい」マスターの指に領収書が挟まっていた

「ほら行くわよ」

一人で先に店を出て行ってしまった

「あっ！待ってください！あのありがとございました！」

静かになった店内に足音が響いた

「お見事だったよ！さすがだね」

「本当によかったのか？」

その男が椅子に座った

「何のことだ？」

「あの娘のことだ」

「問題ないから安心しろよ」

「お前本当に校長らしくないな」

「俺の中の校長は、これなんだ後いつもの頼むな」

「あいつらがどう動くか楽しみだね」

タイミングよく凄く黒いブラックが校長の前にだされた

「ナイスタイミングだな！」



女達（ガールズ）の行動（パーティー）（後書き）

次回予告

何！どうなってるの！2人の中が暖かい感じになってるし！

とりあえずもう夏なのよ！

教室熱いのよ！

なので次回は、熱苦しい教室 ね！

熱苦しい教室（前書き）

「クーラーが動かない」

「気温35・・・」

『ありえな～～～～い!』

## 熱苦しい教室

さて社会見学から3日がたった

今日は、最も高い35度をマークした

「地球おめでと〜最高気温だつてよ〜よかったね〜」  
とダウンしながら愚痴つてると

「妄幻どうしたの？元気ないわね」

と後ろから涼しそうな顔しながら話しかけてきた

「熱くないのか？」

「ぜんぜん平気だけど」

と俺の前そう緩奈の席に座った

実は、席替えて教室の中央の後ろをゲットそして右が希想

左が曲狐で前が緩奈である

「あれ、二人いないけど？」

「あの二人なら奏達と話してるけど」

そつえばあの三人の出番なかったよな〜

「あの三人もダウンしてるのか？」

「ミレナがダウンしてたわよ」

「一人だけね〜意外に元気だな」

そこに校内放送がながれた

（現在校長がクーラーの管理機械を壊してしまったため明日までク  
ーラーがつかみません）

そして沈黙

『ふ、ふぎけるな』

「話し変わるけど曲狐に告白されたの？」

「えっ！なんで知ってるんだよ！！」

なぜか緩奈の方が驚いてる

「本当に告白されたの？」

「緩奈知ってるから聞いたんだよな？」

完全に把握した俺は、冗談に真面目に答えて緩奈がパニックになっている

「どこで告白されたの？」

緩奈の目がガチだ

「観覧車だよ」

「返事はしたの？」

「してない・・・本当に好きか分からないから」

「意外に真面目なのね」

そこに二人がやってきた

「おにい〜本当にクーラー動かないの？」

「校長が壊したみたいだぞ」

「明日って校長が話して夏休みだから、私達が使っ機会ないかもね」と曲狐が言ったなんかやけに俺をチラチラ見ってくる

「そっか〜夏休みか〜みんなでいっぱい遊ぼうな！」

『うん！』

とそこに佐々木が走ってきた

「先生がみんな夏風邪でダウンして授業できないから校内で自由にしてらだつて」

さてみんなをまとめるかな

「みんな！これから寝るのもアリだし自主練もOKだ！自由に行動していいぞ〜！」

『了解！！！！！！！！！！』

さてクラスの半分がどこかに消え数人が爆睡している

「自由にするなら解散でいいのにな〜熱い・・・」

「そっだ〜X組の情報聞く？」

突然のことに周りが静かになった

「どんな情報だ？」

「よく行く喫茶店のマスターからの話」

みんなが真面目に聞いている・・・ここまで真面目なのは、あの時みたいだ

「まず、OBってことね、次にクラスリーダーがX組に入る確率が高いんだって」

みんなの視線が俺に集中した

「お、おい！俺まだ一年だぞ」

「後、指導者のことなんだけど男性だって……これが新しく入った情報よ」

とそこに先生が来た

「今日は、ここまですべてさくだから帰宅！準備できたら帰っていいよ」

それだけ言って帰ってしまった

「それじゃみんな勝手に解散な」

ぞろぞろとみんなが帰っていった

「俺達も帰ろうぜ！」

「賛成！帰ろう！」

そしてまた俺達の一日が終わった

## 熱苦しい教室（後書き）

### 次回予告

なんか平和に終わったな

今回は、長い校長の話だな　ヤダな

この校長は、話が短いよ

えっ！マジ！？

次回驚き！3分間の校長の話し

驚き！3分間の校長の話し (前書き)

「夏休みか！意外に早くきたな」

「幻にいく！学校行くよ！」

### 驚き！3分間の校長の話し

熱い・・・周りには、あんまり生徒がいないみたいだが、遅刻しているのかと心配になる妄幻と違い

「幻にいゝ今日終われば夏休みだよ！な・つ・や・す・みー！」  
凄いやつぱり元気であつた

「異常に元気だなゝ熱くないのか？」

そうこの妹は楽しいことが近くになるにつれ元気がますのだ  
本当に元気になるのだ

「あれ？門に先生がいるねゝ」

門に立つているのは、杉岡 林先生だ

『林先生、おはようございます』

なぜかいきがピツタリになつてしまつたやつぱり兄弟だな

「徳岡兄弟か、ここから体育館まで行け」

「直接ですか？」

「そうだ」

俺と妹は、門から体育館に行く途中に見慣れた3人が歩いていた

「よ！奏 ミレナ 夏連」

ダルそうにこつちを向いて挨拶してきた

「幻ゝ元気だなゝ」

「妄幻さん元気いっぱいですね」

「幻君ゝ元気だねゝ」

とやつぱり元気がない

「おはよゝみんな元気がないなゝ明日から夏休みだよゝ！」

「お前が異常に元気なだけだ」

と言っている

「幻！夏休みどうすの？」

「そつだなゝ多分いつものメンバーで会つかな」

「私達も混ぜて！」

「別にいいぞ」

「てか誘う予定だったしね」

そして体育館に近くなったのでここでいったん別れた

「緩奈と曲狐どこにいるかな？」

「おにい！あそこにいるじゃん！」

一組の列の最後尾に二人が座って話していた

「おす！緩奈と曲狐」

「おはよう！妄幻君」

「おはよう妄幻」

と挨拶を済ませて座る

「おはよう！曲狐と緩奈」

「おはよう想ちゃん」

「おはよう想」

と話しているときいきなり壁が開いてそこから先生達が入ってきた

「あそこにエレベーターがあつて職員室に繋がってるの」

冷静に説明する緩奈にもビックリしたがアレはするいな

「これより、終了式を始めます！最初に校長先生の話です」

まってましたと言わんばかりに走ってステージに上がりマイクを掴んだ

「明日から夏休みになる！みんな楽しくやってこい！新学期にまた会おう以上！」

とまた走って元のの場所に戻っていった

「約3分ね・・・前回より6分短くなったわ」

と時計を見ながらぼそりとつぶやいてたのを聞いたおれは

「前회가9分で今回3分！短いな」

それからいろいろな注意事項を聞いて約20分がたった

「これにて終業式を終わります」

そんでそろそろと教師がエレベーターに乗って職員室に戻ってしまった

「さて帰りますか」

緩奈が立ち上がった

「帰っていいのか？」

「もちろん」

そして俺達は、学校を後にした

「夏休みどこで集合する？」

「駅前の広場に集合してその後ファミレスに行つて考える」

「いいわね」

「賛成だよ 想ちゃん」

「なら時間どうすか？」

『9時50分！』

「なぜユニゾン！？」

とこんな感じで夏休みを迎えたのだった

驚き！3分間の校長の話し (後書き)

次回予告

さて夏休みにやることいっぱいだな～！

夏だぁ！海だぁ！孤島だぁ！プールだぁ！S S か！

夏だあ！海だあ！孤島だあ！プールだあ！S S か！（前書き）

夏だな

夏だあ！海だあ！孤島だあ！プールだあ！S S か！

現在9時45分天気は、晴天である。そして俺の到着した時には、緩奈と曲狐が到着していたのだった。

「遅い妄幻…罰としてお茶買つてもらおうかしら」

「俺だけかよ！？希想だつて遅れたのに」

「想ちゃんは、別なんだよ〜堪忍しなさい」

と二人から攻められていると後ろから追加で遅刻組がやってきた。

「みんな早いな〜まだピツタリなのに」

「湊が寝

坊したしね」

「仕方ないでしょ…眠たいの我慢できないんだから」

まったくこの3人元気だな〜

「夏連、ミレナ、湊おはよう」

「遅刻した三人には、罰として私と緩奈にお茶を奢ること〜いいかな」

「拒否権ある？」

「ないよ」

とこんな感じでスタートした夏休み初日これからどうなるのかね〜さて場所変わりファミレスだ。

「それで、夏休みどう過ごすんだ？」

「いい質問ですね〜まず、孤島に行ってバカンスだよ！」

孤島だつてよ〜そこでバカンスね〜

「いや無理だろ」

「行けるよ！私達とあまり変わらない高校生が行つたつてこの本に書いてあるもん！」

その本が某団長様が無理難題をやつてのける本じゃなかったらやれるかもな〜

「なんで妄幻君は、変なん目で私をみるの？」

「なぜつてそれは、曲狐が持つてる本のせいだな」

「なんでよ〜面白いのに〜」

「確かに面白いがこの本のように孤島に行けるわけがない！どこにそんな金があるんだ？それに知り合いに所有者がいるのか？」

「幻の言うとおりだな。さすがに無理だぜ」

夏連が珍しく同意してくれたおかげか、しぶしぶ諦めて次のネタにいきやがった

「なら、カラオケ10時間耐久勝負！」

『却下』

皆の声が一つになった

「なら、映画三本はしごでどう？」

むっ！これは俺は、否定できない。昔4つ連続で観たからな...

「いやよ面白いのがないもの」

またしても皆がうなずくと

「なら...海行こうよ！」海ね。確かに海水浴場あるけど、水着あったかな

「いいね！私は賛成！」女子メンバーは賛成らしいなら

「なら行くか」

「珍しく同意したね！」俺は楽しければいいと考えてるから反対なんてはなから考えてないぜ。そしてしばしの雑談後今日は解散してまた明日にすることになった

「宿題ちゃんとやっておいてよね！」

とブンブン手を振りながら帰って行った

「あいつ元気だな」「おにい。帰るよ。早く涼しいところに行きたいんだけど」

「おう！なら帰るぞ！」

夏だあ！海だあ！孤島だあ！プールだあ！S S か！（後書き）

次回予告

俺達は、海にやってきた。そこは男の楽園だった  
ビキニだあ！スクミズだあ！男の楽園

ビキニだぁ！スクミズだぁ！男の楽園（前書き）

水着パラダイス

## ビキニだぁ！スクミズだぁ！男の楽園

さて俺は現在海水浴場にいる。周りは美しい女性であふれ俺の心を満たしていく

「さて、泳ぐぞ！」

『おー！』

さて、今回の水着達の紹介だ。

No.1 曲狐 白いビキニ

No.2 緩奈 黒の極限まで露出した水着

No.3 希想 学校指定のスクミズ

No.4 夏連 白の競泳水着No.5 湊 可愛いフリルがついた水着

No.6 ミレナ 緩奈の白版こんな感じで楽園なんだよ！楽園！

男の中で勝ち組だぜ！

「妄幻少し遅いわよ」

「緩奈が速いんだろ！って夏連も速いな」

実は説明してるうちに折り返して岸に戻ってきていた。まだ3人だけだが次に着たのはミレナだ

「4番もらったよ」

なんとも見た目と違い幼いミレナ…これがギャップ萌えなのか！？

「やっぱ速いな」って幻遅いな」私に抜かされてやがるし」

「なつテメエー！いつか絶対に抜かしてやるからな！」

と話していると、我が妹である希想がゴール

「おにい」速いね」私もう疲れたよ」

「バテるの早いな」

そしてビリの曲狐だ

「みんな早いよ」全然追いつけないし」

とまあこんな感じで楽しんでいた。日頃のストレス解消もできていいもの見てもう文句なしだな「さてたっぷり泳いだら定番のスイ

力割やらないか？」

「スイカ割なんて何年ぶりかしら…楽しみだわ」「スイカ割やってみたかったんだよ！早くやろうぜ幻！」

「スイカ割って何かな？ねえ…湊教えて」

テンションの高い夏連に懐かしむ緩奈知らないミレナと教えてる湊  
つて感じで楽しんでいるとベースからスイカと棒を持ってきた曲狐  
と希想がやってきた。

「持って着たよ…このスイカ重いから美味しいかもよ」

と希想と一緒に持ちながら笑顔にやってきた

なぜか希想が不満そうな顔しているが

「どうした？何かあったか？」

「いや…棒より銃の方が持ちやすいなって思ったただだよ…おにい  
はあ？そんなだけで不満なんかよ！」

「ハイハイそんなだけで不満な顔するなよ」

「えっ！不満な顔してのる！？」

こいつ自覚なしかよさすが我が妹だな

「してるぞ」

妹が撃沈したようだがほつといてスイカ割の準備に取りかかる

「てか、これ誰が割るんだ？」

「今回初めての夏連が一発叩いて、それからミレナがやってみんな  
でこいつを食べる」

なるほどね」と納得している夏連その後ろでミレナが

「突きじゃダメなの？」そういえばミレナは、レイピアを使つてた  
なうだからってスイカを突いたらいろいろいるとグロイよな「ダメだぞ  
ちゃんと叩かないと！叩くからスイカ割なんだから」

「仕方ないな」なら叩く」

仕方ないらしい…俺なんか間違いつたかな？

「準備完了であります」

とまるで某カエル宇宙人のような発言をしながら笑顔の曲狐

「よしっ！夏連目隠しと棒を装備せよ！」

「おう！わかった！」

さて上手く誘導して希想を叩かせるか

「回れ右！そして5歩前進して振り下ろせ！」

「了解！いくぜえ！」　そして希想の前で振り下ろした棒は、見事に命中した…

「おにい！夏連を使ってイタズラしない！」

そう手に持っていた銃に「なんだ希想かゝってなんでスイカの所にいるんだ？」

現状を把握しきれない夏連

「夏連これはおにいが私の場所まで誘導してやらせたから、別に私がスイカを移動させたわけじゃないからね」

ふむふむとうなずくと棒を俺に向ける

「とりあえず、幻を殴るのが正しい選択なわけだな？」

「そうだよ」

えっ！なんでそうなる

「いや！久しぶりに人を殴るな！力加減忘れちゃったぜえ」

おい…待てそれって死ぬかもしれないじゃないか「確か相手を攻撃するときに！受けてみてこれが私の全力全力っ！って言うんだよね？」

「いや違うから！白い悪魔出さなくていいから」「ダメかゝやっぱリユ　君いないから？」

「その発言ギリギリだ！夏連ストップ！」

まっ結果を言うと殴られた。

そしてみんなでスイカにかぶりつく

「甘いな〜！」

「これなら何個でもいけるかも！」

「女性の敵になりかねない旨さがあるから油断大敵だぜ」

と女子メンバーは、楽しんでいるが俺は頭が痛いんだよ！

「妄幻大丈夫？」

「なんとかなくまったく夏連のやつ手加減してほしかったぜ」

まだ痛む頭を撫でながらはなしている

「妄幻君大丈夫？結構強く叩かれてたけど」

曲狐が心配そうにスイカを持ちなが近づいてきた「まだ少しツキツキするけど大丈夫だぜ」

安心したのか、笑顔になる曲狐やっぱりこの二人は優しいな

「妄幻顔がにやけてるわよ」

「もしかして…えっちい妄想してたのかな？」「なんでそうなる！俺は健全な男子だぞ」

とはしゃいでいると

「なあ！夜に肝試しやらないか？」

「肝試しね〜夏連いとこ知ってるのか？」

「あの林の奥にいるらしいぜ」

「いいね！やろう！いいよねみんな？」

曲狐の笑顔につられて頷いてしまった

周りを見ると相談していたそして

「いいわよ。やりましょう」

その声と共に人生初の肝試しをやることになった

ピキニだぁ！スクミズだぁ！男の楽園（後書き）

次回予告

夏連の提案により俺達は肝試しをやることになった

さて俺は誰と一緒に肝試しするのかね？

肝試し

でっ出た！

肝試し（前書き）

盛り上がるといいが

## 肝試し

さて現在夜10時を過ぎたころ俺は夏連と例の林を歩いている。  
なぜ俺が夏連と組んでいるのかというと

「さて、クジでメンバーを決めるから引いてくれ」

俺の指示に従い皆がクジを引く

「それで、俺が最後に引いて…よし！みんな色確認してくれ」

え〜と…曲狐が青で緩奈が緑色で希想が青でミレナが緑色で湊も同じで夏連が赤ってことは

「俺と組むのは、夏連だな」

「わかったぜ！幻の泣き顔拝ませてもらうぜ」

なぜか他のメンバーからドヨ〜ンって効果音が似合いそうなオーラが出ていた

「一緒に行きたかったな〜」

「たしかに…唯一の男子だしね〜おにいと一緒に楽しそうな予感がするもんね〜」

「近いうちに独占するとしますか」

「肝試し楽しみだが、幻君も両手に花がよかつたんじゃないのかな〜？」「男ってやっぱりハーレムの方がいいのかね〜」と最後の方がひどい言われようだが気にしない気にしたら負けなのだ

俺が葛藤してる間女性メンバーで話し合いがあったらしく、それにより順番決定して今にいたるのだ

俺達は、何事もなく平和に移動中だ

「これじゃなんもなく終わって肝試しじゃなくね？」

「そうだな…！なんだ〜風かよ〜脅かしやがって！」

「夏連って意外と怖がり？」

「な、なんだよ…べ、別に幽霊とか信じてるわけじゃね〜よ！ヒヤッ！」やっぱり怖がりだー俺が手を叩いただけで驚いているし

「幻…死にたいの？」

ヤバいマジな顔になってやがるランク的には問題ないけど

「今は、勝負したくないからパスだ」

いろいろあったが折り返し地点に到着したところで問題が発生したのだった

「なあ〜幻あそこに人いないか？」

「…！なんでアイツがいるんだよ！」

そうアイツだ黒服のX組みの立ち方からしてリーダーのスパイダー

「知り合いなのか？あの黒服」

「アイツは、X組みのリーダー、スパイダーだ！曲狐をさらった犯人グループのリーダーだ！」

「アイツが…殺なら今だよ」

アイツの戦闘力は、教師と互角かそれ以上そんなヤツに勝てるのか…

「俺達だけで勝てる確率は、0に近い…正直勝てる気がしない」

そんな話しをしているうちに気づかれた！

「貴様は、何を望む？そのためにはなら何を犠牲にできる？」

「アイツ、本物じゃない？アイツがそんなこと聞いてくるやつじゃなかった」

「答えよ！貴様の望む物はなんだ！」

「俺の望む物…」

考えたこともなかった…ただ漠然と生きて…とりあえず学校行って

…妹の世話して俺が望む物…

「…！げ…！幻！」

「！大丈夫だ…アイツ誰なんだ？」

手には、DBBが装備されているけど復元されない

「決まったか！」

「答えるのか？幻！」

心配してくれてるみたいだな〜夏運つてこんな顔できたんだな

「いいぜえ！教えてやるよ！俺が望むのは、今この楽しい時間を共にしてる仲間達との青春だあー！」

静寂が戻った…そしてアイツの方を見ると消えていた

「消えたみたいだな…夏連大丈夫か？」

「なんとかね〜イテテ足挫いただけだよ」

地面にペタリと座ってしまっているので仕方なく「帰るから、おんぶしてやるよ」

「う、うん／＼／＼／＼」何故か顔を真っ赤にしなが背中に掴まる夏連

「どうかしたのか？」

「なッなんでもねえーよ！」

その後ホテルに帰りみんなに報告して今回の肝試しは、終了した

## 肝試し（後書き）

### 次回予告

肝試しは、中止になったけど次のイベントは絶対に成功させてやる！

星観察（I bring  
e s i r e  
）

星観察 (I b r i n g e s i r e) (前書き)

昨日のっていったいなんだっただろう・・・

さて今日は、また海に行こうと考えたが山に行くことにした

「みんな！虫網と籠もってきた？」

「大丈夫だ、俺が全部持つてるから前向いて歩かないと転ぶぞ曲孤」  
「だいじょぶ」 転ばないからっ！わあああ！」

ドシン！と音をたててみごとに転んでしまったのであるまだ下がコ  
ンクリートじゃないのが救いだっただのか曲孤はすぐに立ち上がった  
「あらら〜ズボンが汚れちゃったよ〜」

ズボンにおもいつきり茶色の汚れがついていた

「凄く汚くなってるよ〜曲孤ダサいの〜」

「想ちゃん！ダサいって言ったな〜！！怒ったのだ〜！」

ヤバ！逃げる〜とか言いながら追いかけてっここが始まった

「幻〜あいつらどんだけ元気なんだよ・・・」

「俺に言わないでくれよ」

二人は俺達を置いて山を駆けていってしまった

「私達も行きましょう」

みんなの同意しゆつくりと歩きだした・・・ここで異変に気がつい  
た一人いないのだ

「あれ？ミレナどこいった？」

他のメンバーも知らないみたいだ少し待ってみるといた

「お〜いみんな速いよ〜」

結構遠くから走ったのか汗をかきながら呼吸が凄く乱れていた

「おいおい俺達そんなに速かったか？」

「速すぎだよ〜」

やっと合流したがこれでは目的地まで行くまでに時間だけが過ぎて  
しまう

「仕方がないか・・・俺がおんぶするから夏連荷物頼んだ」

荷物を全部夏連に任せて俺は、ミレナを背負って山を登ることにした

そして休憩などをしながら歩くこと一時間やつと目的地にいた

二人は、目的地でプロレス技などを使用した戦闘をおこなっていた

「おつそ〜い！てかなんでミレナを背負ってるのよ！」

「ミレナの足じゃ時間が足りないからおんぶしたんだよ」

そして予定より遅れてスタートした虫取りが始まった

「なかなか捕まらないんだな〜みんなは、どうか？」

曲孤は、えい！やっ！とかまるで剣か槍でも使ってるような声を出しながらがんばって虫を追っていた

綾奈は、じつと待ち虫がきた瞬間に網を降るというまるで武士みたいな可憐な技を披露していた

妹は、待て〜！とか騒ぎながら振り回しながら追っかけていた

夏連、奏、ミレナがなぜか三人で同じ虫を狙っていた

「みんないるんな意味で凄い俺もがんばるか！」

それから時間たつのも忘れて一時に遅めの昼食にした

「今日の弁当は、俺の手作りだからよ〜く味わって食べるよ！」

は〜いの声とともにみんな勢いよく食べ始めた

「幻の料理って凄く美味しいな」

「当たり前だぜ！毎日作ってるからな」

などと話してるうちにみんな食べ終わってしまった

「今日は夜星みるんだろ？」

「そうだよ〜みんなで夏の星をみるんだよ！」

「なら早めに帰って夜に備えようぜ」

俺の提案により予定より一時間早い帰宅になった

帰りが下り坂だったのでミレナも好調なペースだった

「各自観察に必要な道具をもって駅前広場に集合でその後、出発だ」  
『了解』

言っただが俺達、兄妹と夏連と奏は道具を持ってないから暇なのだ

「なあ〜夏休みの宿題って終わった？」

と夏連がみなに問いかけた

「終わってないだろ〜だって初日から泊まりで遊んでるんだしな」

そう俺達は、ずっと遊んでいたのだそれで終わってる人がいるなら  
予定決めた日に徹夜した人しか終わるはずが無いのだ

「まっみんなでやればすぐ終わるよ」

『だよね』

そしてそれから40分ぐらいしてから綾奈と曲孤とミレナが戻って  
きた

「さてみんなそろったわね・・・でもう出発するんでしょ？」

「そうだな、よし行くぞー！」

おー！とみなの声が一つになり目指す広場に向かった

それから1時間ぐらい歩くと目的の広場に着いた

「ここが絶好のポイントだ」

周りに街灯がなくなると星を見るためだけにあるような広場だ

「結構暗くなってきたね」

そして夜空を色鮮やかに彩る星が空一面に現れた

『綺麗〜！』

みんながそれぞれに星を眺めると想が

「みんなで星にお願い事しない？」

「いいね〜！けど流れ星じゃなくていいのかな？」

みんなが悩んでいるので

「悩まなくてもいいんじゃないか？願うことが目的なんだからさ」

「幻らしいよね〜」

「それじゃみんなで願い事を心のなかで言おうぜー！」

『せーのー！』

星観察 (I b r i n g e s i r e) (後書き)

次回予告

みんなそれぞれの大量の星に願いをのつけた

だが学生の俺達にはやらないといけないことがある！  
宿題だ！

なので次回は、宿題 面倒だけどやらないとな

宿題（前書き）

さて夏休みの宿題をやるか

## 宿題

俺達の夏休みは、ずっと遊んでいた…そう遊んでたんだ！だから宿題なんてやってるはずがない！」ってことで夏休みの宿題をやるぞ」

「なにか説明がなかったような」

「だよ〜ってみんな同意しやがって！」

「お決まりってやつだ」了解です！ってみんなしてケータイをチエックして

「たしかにそうだよ〜みんなで終わらせちゃお」

そしてみんなで宿題をおわらせるべく協力した

「って！緩奈は、もう終わってたのか」

「昨日終えたわ」

俺達の宿題は、ワーク20ページほどなのだが綾奈のやつもう終わってるのだ。いつ終わらせたんだけ？

「緩奈が終わってるなら答えわかってるんだし、先生として俺達の手伝いな」

「いいけど、作者さん…私ってそんなに影薄いかしら？」

《いやぜんぜん》

「ならなんで私の名前が綾奈になってるのかしら？」

後ろからゴゴゴオオオと黒いものが見えた

《アレ〜間違えてた？》そして鞭を回避して逃げ出した

「逃げたようね…」

そんなこんなで始まった夏休みの宿題。先生が先生なのでサクサク進み二時間後には半分以上終わっていた

「結構早く終わったな〜さすが緩奈が先生なだけあるな」

「あなた達が早くやっていればこの時間遊べたのよ」

緩奈に的確な指摘をされ反論のしようがない

「けどそれなりに楽しいよ〜奏ちゃんや連ちゃんに幻君達と会えたんだし」

『ちゃんずけ辞めるー!』

相変わらずのコンビネーションを披露する三人組である

「まっ確かにみんなと会えて楽しいのは、同じだしね!」

「妹よいたのか?」

「いたよ!酷いよ私の存在忘れるなんて」

あゝいじめちゃいけないんだ!と曲弧から怒られみんなから笑われてといるいと大変だった

「てかおやつの時間だよ〜食べようよ〜緩ちゃん」

「そういえば、誰か夏休みの初日に宿題先に終わらせるよ〜って言うてなかったけ?」

そういえば言ってたよ〜な〜:気がするけど思い出せない。

「誰かなんてどうでもいいよ〜おやつだよ緩ちゃん!」

相変わらずのマイペースのミレナは、おやつを待ちきれないのかそわそわしてるし:幼児かよ!

「はいはい、今持つてくるから落ち着きなさい」まるで母と子のような二人を見てると最近起きてる事件がまるで違う世界で起こったことのようにおもえる。

俺が少し緩んだ顔していると妹が

「どうかしたの、おにい?」

俺はただ何も考えずになんもと答えた。

それから緩奈のお菓子を堪能した、ショートケーキである。

「旨いな〜これって買ってきたのか?」

「違うわよ、私の手作りよ」

みんな驚いていた、ここまで完璧だと逆に悪いところを探す方が大変だ

「ここまで完璧ならどこに嫁いでも大丈夫だな〜それに比べて妹よ…」

緩奈は、顔を赤くさせながら何か言っていたが妹が騒いでるので何にも聞こえなかった。

「おにい!なんで私がまるで残念な人みたいな感じで話すのよ〜別

に私は、そこそこちゃんとしてるもん！」

と五月蠅いのではないはいそうですね〜って軽くスルーすることにした  
その後も緩奈の指導のもと宿題がどんどん終わっていく。  
そして午後6時を過ぎたころ宿題が終わり解散となった。

「今日私あまり喋れなかった…」

「そんな日もあるよ〜奏ちゃん」

奏がいつものツッコミを忘れるほどテンションが下がっていた

「おにい！今日は、ハンバーグね！」

と妹がよく頼む面倒なハンバーグを注文してきた。

「はいはい、仕方ないか」

「やったー！」

## 宿題（後書き）

### 次回予告

俺達は、宿題を終えて夏休みのビックイベントの夏祭りに行くことにした  
夏祭り お楽しみに！

夏祭り（前書き）

夏祭りかゝ楽しみだな！

## 夏祭り

今日は、夏の定番イベントである夏祭りの日だ。毎年2000人を超える人が訪れる。

「相変わらずの大人数だな」

「この町唯一のビックイブンドだしね〜おにい！絶対綿飴とリンゴ飴買ってよ！」

はいはいとかるく妹の話しをながし周りを見渡すと大量のカップルと家族であふれていた。いや一つこちらに向かつて来てる三人娘を発見した。「幻〜！速いな〜てか他のメンバーは、まだなんだな」

「いつもより速いね〜珍しく」

「まったく二人分の着付けをやってあげてたら時間が結構かつちやったよ〜奏ちゃんも連ちゃんジタバタするし〜」

と相変わらずの三人を眺めていたんだが、ふと疑問点があった

「ミレナってすいか割り知らなかったのに着付けできたんだ！」

そう、海に行った時にすいか割りの説明を受けていたからってつきり日本文化を知らないのかと思っていたのだがどうやら違うらしい。

「お母さんの趣味でやっていたのを教えてもらったんだよ〜幻君それ自分でやったの？」

「妹のもあわせて俺がやったぜ！上手いだろ」

母さんが海外に行く前に指導してもらったのだ。母さんが言うには、可愛い妹に着物を着せないで夏祭りに行かせるなんてかわいそうなこととしてわいけません！

とかなんとか言って俺に教えたのである

「プロにも負けない上手さだね〜さすが！幻君だね」

と話していると、やってきた最後の二人だ

「いやいや、みんな早いね〜集合時間の20分も早いよ〜」

「それだけ楽しみなよ祭りがね」

これで全員集合したので出発だ。

一応説明しとくと、屋台の数が約600店で踊りを披露するグループが100組もあり花火の玉の数毎年、24000発も用意される超ビックイベンドがこの夏祭りだ。なのに名前がしょぼい普通に夏祭りなのだ。

「おにい？誰と喋ってるの？」

「大人の事情つてやつだ、気にするな妹よ」

なんだかんだでどんどん進んでいき、射的などがある遊等ゾーンにやってきた。

「ねえ！みんなで射的やる！？」

景色を見ると可愛い物から格好いい物まで多数的として置いてあった。

「いいね！やるうぜ、みんな！」

そして俺達は、一列に並びみんなで狙い始めた。「幻君、これって落としたら私の物になるんだよね？」

「そうだが、だから欲しい物をよく狙うんだぞ」

ミレナは、自分の持ってたコルクを全部使って欲しい物を落として、ぴよんぴよん飛び跳ねていた「もう！この銃重すぎ！私の体に合わないよ！」と普段から銃を使っている妹が怒りながらぬいぐるみを狙っていた。

「おい、そんなふう狙ってたら…人の話を聞かないからラスト無駄にするんだぞ」

「うるさいな！ならあれ落としてみてよ！」

俺は、妹が狙っていた大きいぬいぐるみを一度みて…深呼吸をした後的を見ないで落としてみせた「兄ちゃんやるね！名前なんて言うんだ？」

「徳岡妄幻」

店のオヤジがニヤニヤしながら懐かしむみたいに徳岡か〜とボソボソって言うてるのが聞こえてきた。

「お前、親父にそっくりだな〜まるで落とすのが必然みたいな感じでやりやがるところがな…」

親父は、ここの常連らしく毎回大量に景品を取っていくらしい。射的をやってる時の親父と俺がそっくりなんて初めて知ったぜと新たな発見に酔いしれてると、隣から俺を呼ぶ声が聞こえた。

「幻も私のも狙い撃つてくれよ。あのP90が欲しいんだよ。」

結構でかい箱の近くに小さい的があり、それを落としたらゲットらしい。「まったく、俺の得意分野は刀なのにな。よっ！」

見事にあて俺の目の前に飛んできたので、格好よくキャッチして「オヤジ！景品もらっていくぜ」

とついつい決めポーズを普通にしてしまった

「親父と本当にそっくりだな。ポーズまでそっくりだ」

その後も何個か景品をいただき次に食彩ゾーンに移動した。

「おにい！約束覚えてるよね！？」

たしか、綿飴とリング飴を買ってやるって言ったやつだったな。と思いつきながら

「覚えてるよ。すっかりとな」

今回は、ゾーンの入り口近くに目的の店があったから助かったぜ。

前は、結構奥にあったから探すのに手間がかかったからな。と思いついて回想していると、おにい早く〜と妹に呼ばれていた。

「慌てなくても無くなりなんてしないから、落ち着けよ」

早く食べたいんだよ！ともう我慢の限界らしい

「ほらよ。ゆっくり食べるよ」

「後、綿飴もだからね！」

わかっているよと言いながら、隣にある綿飴の店に行き妹に綿飴を渡した。「それにしても、結構いるわね…」

「ビッグイベントだからなく去年より人が多いらしいぜ」

緩奈と話ながら、周りを見るとカップルが手を繋いで歩いたり、親が子に買ってあげたりといろんな人で溢れていた。

「幻！口開けな！」

と後ろから笑顔の夏連が何かのバックを持ちながら接近してきた。

「こっか？」

あーんつと口開けるとそこに熱々の球体が放り込まれた！それも結構デカいやつをだ。

「美味いだろー！このたこ焼き」

うーっうーっうー！と言葉として成りたたない声を出すしかできなかった。

「夏連！殺すつもりか？たしかに、美味いけどよ！」

「そんな怒んでもいいじゃない！さっきのお礼しなかった、だけなのに！」

ブイツ！と頬を膨らませて明後日の方を向いてしまった。とその時会場にアナウンスが流れた。

「これより、10ヶ所のステージで100組のダンサー達の連続披露をスタートします！皆さんステージにご注目ください！それと、ダンサーをバックに花火も打ち上げますのでそちらも見逃しなく！」  
アナウンスの直後に100組のダンサー達の一番目の人達が一斉に踊り始め、その10ヶ所のステージを彩る花火もスタートした。

「綺麗だなー幻！」

「そうだな…相変わらずの見事な花火とダンスだな」

俺達が話していると後ろから、曲弧が俺達の間に入り込んできた。

「また来年もみんなでこれるよね？」

「もちろん！」

気がつくともみんな各ステージに散っていて、俺と夏連だけになっていた。「ねえ！幻…さっきの…ごめんね」

いきなりの謝罪にビックリしたが、すぐにわかった。

「別に気にしてないぜ。あの時の夏連可愛かったぜ」

「バーンツ！と花火の音が響いていた」

「え？今なんて言ったの？」

「秘密だ」

「えー！いつか教えてくれるんでしょうね！」

いつかねーいつになるんだろうかと考えてもなにも浮かばないから一応返答しといた。

「はあ？まったく…幻のこと…な人達って大変だぜ」

花火で一部聞こえなかった。なんて言ったらかすごく気になる。

「今なんて「秘密だぜ！乙女のな！」」

## 夏祭り（後書き）

次回予告！

夏休みも終わり、いよいよ体育祭の季節になった。  
なので次回は、体育祭練習

## 体育祭練習（前書き）

本当にうちの学校って不思議だな

## 体育祭練習

夏休みも終わり、文化祭の準備で近隣の高校は忙しくなるのだが、うちは違っていた。これから体育祭練習なのだ。

「てか体育祭ってこんな時期じゃなよな？」

となにげなく木陰で休憩中の曲弧に話しかけたが返事がない。気になり見てみると寝ていた、それも結構しつかりと寝ていた。

「これって独り言になるな…」

なんとなく前を見ると玉入れの練習をしていた。中央で合戦が起き、遠距離部隊が玉を投げている…いや発射していた。

「あれって戦争みたいね」

見た目は、白と赤の玉を飛ばしてるだけだが、それを砲弾にすれば戦争してるように見える。

あつ！一人前線から飛んだ…かわいそうなやつだな…

「どうしたの？顔青いわよ？」

「な、なんでもねえーよ！」

そんな会話をしていると、前線からこっちに何かが飛んできている！俺は回避行動したが俺と同じ方向に！

「っ！痛いな、誰だよ！？…柔らかいな…」

俺の手に柔らかい

「まったく…そんなに触りたいのなら言えばいくらでも触らせてあげるのに…」

へ？緩奈は、なに言ってるんだ？

俺には、理解できなかった。視界がまだ0な俺にどうやっても見ることができないからだ。

「イテテ…ごめんね…ってノノノこの変態！どこ触ってるのよ！  
って無視して揉んでるんじゃないか！」

そして、意識が闇に落ちた最後に聞こえたのが…ドスッ！という音だった。

茜色に染まる部屋の中一人眠る。そう俺だ…今この部屋には、俺一人だ。なぜか頭に包帯を巻かれていた。

「また、保健室か…よくお世話になってるよな…俺って…」  
けど、なんで俺が保健室に運ばれたのかわからないのだ。

たしか…休んでたら緩奈がきて、誰かが飛んできたんだ…柔らかい物が俺の手に…！女子の胸に手がそれに気がつかないで手に力を入れたら揉んでしまった…そして頭に一撃をくらったのか！

「てか、アレって誰だったんだろう…知り合いならいいんだけどな」  
」

廊下から足音が聞こえてくる。いつものメンバーの足音だけど、誰のかわからない…そして保健室の前で止まった。

そしてノックもなしに開かれた扉の奥には、夏連がいた。

「目覚ましたんだな…たく、痴漢して保健室送りになるなんてね…」  
とニヤニヤしながら入ってくる夏連だが、顔が少し赤い…時間帯のせいかわからないが。

「あれは事故だ！俺のせいじゃない！」

あつそ…と軽く話しを流され夏連は、近くの椅子をベットの近くまで引つ張ってきて、座った。

「人の胸揉んどいて感想もなしかよ…」

「？まさかあの時の女子生徒って夏連だったのか！？」

コクリと頷いた夏連の顔は、ますます赤くなってしまった。

「すまなかつた！てか、なぜ感想を求める？俺が言える立場じゃないけどさ」

「異性に触られるのが初めてだったから／＼／＼」

それだけ言うと勢いよく立ち上がり、廊下の近くまで逃げてしまった。

「柔らかくて気持ちよかつたぞ…」

夏連は、走って逃げてしまった。

「あいつなんで最後にありがとうなんて言ってたんだ？」

ちなみに俺の練習は、見事に全部休んだため全力一本勝負になって

しまつた

## 体育祭練習（後書き）

### 次回予告

俺は、練習を終えて偶然奏と会ったそこで問題が発生した！  
閉じ込められた二人

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2682q/>

---

私立望標学園

2011年10月12日12時53分発行